令和６年度　　園評価書

園番号　30　　園名　　八幡こども園

Ⅰ　経営の重点に関わること

評価段階（A：よくできている　B：概ねできている、C：あまりできていない、D：できていない）

1　教育・保育目標	2　重点目標	評価指標	園説明	園評価	関係者評価	園関係者評価委員から	改善策（来年度の具体的な取組目標など）
心身ともに 豊かな子	知りたい！（興味）・やりたい！（意欲）・伝えたい！（自信）	やさしく　～関わる力～ 身近かな人と笑顔で心地よい挨拶を交わし、親しみをもって関わることができるように努めている	・職員が明るく笑顔で登降園時に「〇〇ちゃんおはよう」と挨拶するよう心掛けたことで、言葉で挨拶することは恥ずかしがる子もその子なりの挨拶の仕方で気持ちを伝えてくれるようになってきた。今後も職員自ら先に笑顔で挨拶を交わしていくようにしたい ・保育者が散歩先で出会った人や園の見学者の方に挨拶することで、子ども達も親しみをもって挨拶しようとする姿が見られている	B	A	・言葉では言い表せないけれど言おうとしている子どもの姿を先生方は認めている ・保育者が子どもの姿を肯定的に声を掛け合ったり、肯定的な見方で認めていることで、子ども同士で「いいね」と言い合うようになっている ・自分でやりたいという思いを尊重し、時にできるまで待っていただけることがありがたい	・子どものしぐさや表情から気持ちを丁寧に受け止め、やさしくかかわってくれる人がいるという安心感から、子ども自ら思いを表現できるようにする ・子どものがんばっている様子や過程を認めていき、もっとやってみたいと意欲や自信につながる気持ちを大切にする ・おもしろそうと感じている気持ちを見逃さないようにし、やってみたらできたという体験を積み重ねていく
		はつらつ　～学びの芽～ 自分の思いを表現したり試行錯誤したり、子ども達が夢中になって遊べる環境を用意し、互いのことを「いいね」と認め合える関係を築いている	・保育者が子どもの試したり工夫したりする姿を「いいね」と認めてきたことで、子ども同士でも面白い発見や、製作した物や小さい子に優しくする姿を「いいね」と認め合う姿が見られるようになった ・職員同士も「いいね」と認め合う姿が見られているため、今後は「いいねカード」を活用し、互いの姿を認め合っていきたい	A	A		
		たくましい　～生活する力～ 自分のことを自分ででしようとする姿を「いいね」と認め、自分でできる喜びを自信につなげている	・一人一人の発達に応じて、声掛けや動線などの関わりを工夫することで生活に見通しを持ち「自分でやりたい」「やれる」という姿が増えている。 ・保育者が身の回りのことを自分でやろうとする姿を認め、じっくり関わってきたことで「できた」という経験を積み重ね、自信につなげることができた	A	A		

Ⅱ　各領域に関わること

大項目	中項目	評価指標	園説明	園評価	関係者評価	園関係者評価委員から	改善策（来年度の具体的な取組目標など）
1 こども園における教育及び保育	(1)0歳から小学校就学前までの一貫した教育及び保育	異年齢の友だちとの関わりの中で、大きな子への憧れの気持ちをもったり、小さい子に遊びの伝承をすることができるよう交流の機会を大切にしている	・早番遅番の保育や園庭での自然な交流や夏の合同保育を通し、年下の子は年上の子がする遊びに魅力を感じて「やりたい」と真似をしたり、年上の子が小さい子に場所や玩具をゆずったする姿が見られている ・異年齢の友達と一緒に散歩に出かけることで、見つけた自然物をあげたり、困っている子に優しく関わる姿がより深まっている ・運動会や発表会後の余韻ごっこや季節行事の意図的な交流後に一緒に関わり楽しむ姿がられている	A	A	・年齢問わる関わりあって園庭で遊べる様子がいつもすばらしいなと思っています ・画一的なことを教えるのではなく、何をやりたいのか子どもの気持ちを汲み取り続け、先生方の労力もとても大きいと思います。そうしたことを日々実践していただき行事の内容にも反映していただけることは本当にすごいし、子ども達も恵まれていると感じます ・年長児の遊びは春からの遊びが進化しながらつながっている。先生方が子ども達の思いを汲み取り、わくわくした教材を準備し、やる気が継続していた ・今年度になり職員が減災教育を学び始めているとのこと、来年度に期待します	・子どもの興味、発達にあった様々な遊びが楽しめるように、週案会議や職員間の話し合いを密に行っていく
	(2)一日の生活の連続性及びリズムの多様性への配慮	家庭環境の違いを踏まえ、一人一人に応じた関わりをし、生活リズムや情緒の安定を図っている	・登降園の際に保護者とお子さんの様子を伝達し合い、一人一人に合わせた関わりに努めることができた ・早遅伝達ボードや打ち合わせノート、「病気けがノート」で引継ぎができるように伝達事項は必ず記入し、職員全体で共有できるようにした	A	A		・保護者との送迎時のコミュニケーションやコドモンでのやり取りから子どもの心身の状態を把握し、配慮ができるようにする
	(3)環境を通して行う教育及び保育	子どもの遊びを丁寧に見取り、「やってみたい」と思える素材・教材の提供や声掛け、環境の再構成がタイミング良く行われるように努めている	・遊びを見取り「いいね」と認める声掛けをし、子ども達が「やってみたい」と、自ら遊び出せる素材の準備や季節や発達を見通した遊びが展開できるよう環境作りを行った。また週案会議（2週間ごと）やクラス職員で今の子どもの姿や実態を捉え、共有し園庭環境について話し合った ・保育者の予測とずれがあった時や子どもの遊びが変化していく時にタイムリーに再構成してくようにしていきたい	B	A		・子どもが何に楽しいと感じているか、どんな気づきや経験をしているのかを捉えていく ・子ども理解を深めるように互いのクラスの様子や保育について語り合う機会を増やしていく
2 安全管理・指導	(1)事故防止・防災	年間計画に沿って訓練を行い、自ら考えて行動し危険を回避する力が育つよう指導している。ヒヤリハットに取り組み、職員間で共有し分析することで事故防止につなげている	・様々な状況を想定した訓練を実施し、職員一人一人が自分で考えて行動し、子どもの命を守るということについて考えてきた。訓練の反省点と改善策を話し合い、共有することでさらに意識を高めていきたい ・子ども達に南海トラフ地震が起こった時の被害の状況を具体的に知らせたり、その際の避難の仕方を一緒に考える機会を設けたことで災害についてわかりやすく伝えることができた ・ヒヤリハットの提出率が上がり、職員間で内容を共有し、改善できるところはすぐに改善した。もっと再発防止策についての話し合いが深まるとよかった	B	B		・想定外の大震災に備えた訓練を積み重ねていく ・引き続き気が付いた時にヒヤリハットを出し合い、その都度、職員間で検証し再発防止策を検討していく
3 保健管理・指導	(1)健康教育の充実	健康診断や保健活動を通して自分の体に関心を持ったり、栽培活動や食育活動を通して「食」について関心を広げ、取り組みの様子を保護者に発信していく	・毎月の身体測定の際に「大きくなったね」と声をかけたり、健康診断前にどんな検査や診察をするのか話し、自分の体や健康について関心が持てるようにした ・身体測定の結果はコドモンで配信したり、感染症の報告があった時点ですぐに掲示することで保護者と共有できた ・毎月の食育活動ではテーマに合わせて給食を提供したり、幼児組は栽培した野菜をクッキングにつなげ、苦手意識を減らしたり食に関心を持ったりできるようにした。また活動の様子をボードで知らせたり、「食育だより」を発行し、保護者に発信した	A	A		・食育の日の取り組みを継続していくと共に、年齢に応じた食育を保育に取り入れ、実践の発信を続けていく
4 特別支援教育・保育	(1)支援体制づくりの推進	一人一人の子どもの発達や個性を理解し、具体的な支援方法を検討し、実践につなげている	・きりんの会は職員が協力し合って計画的に進めることができ、活動内容や反省を全職員間で共有し、支援児の理解に努めた ・気になる子のケース会議に全職員が参加できるように時間を設けたことで、子どもの特性や性格を踏まえたうえで支援、手だてを共有することができるようになった。実践後の状況を報告し合い、共有できるようにしていきたい	B	A	・子どもに合わせた対応ができている	・ケース検討の回数を増やすことで、職員間で子どもの個性を共有する機会を作り丁寧な関わりができるようにする
5 組織運営	(1)組織体制の充実	年間計画に沿って分掌担当がリーダーシップを図り取り組むと共に、職員が協力し合って円滑な園運営につなげている	・分掌担当がリーダーシップをとり、週案会議等で進捗状況を報告しあい、職員が協力し合って計画的に進めている ・各分掌担当が行った実践後の振り返りを来年度につなげていけるように記録に残していく	B	B	・組織体制については難しい。分掌の食育、絵本、栽培は保護者に伝えられている	・各分掌担当が企画や運営を行う中で、他の職員からも意見をもらいながら円滑に運営をしていく
6 研　修	(1)研修体制の充実	研修テーマ「もっとやりたい」につながる環境づくりの実現のために保育実践と研究を重ねている	・毎月職員会議で各クラスのエピソード記録を読みあうことで、子どもの実態を捉える機会となっている。さらに意見交換を深め、次月の保育に活かしていけるようにしたい ・公開保育や事前事後研修になるべく多くの職員が関われるよう参加の仕方を工夫した。また指導主事を講師に招き研修の持ち方について意見をいただいたことで、短時間の中で子どもの様子を伝え合い、考察が深められるようになった。研修後、公開保育担当は自身の振り返りを「わくわくだより」で発信し、全職員に周知した	B	B	・組織体制については保護者には伝わりにくくイメージがわかない。職員が研修を行い子どもに反映されていると思う	・全職員でエピソードを検討しながら、語り合える研修体制にすることで子ども理解を深めていく
7 教育・保育環境整備	(1)教育・保育環境の充実	八幡山の自然に触れたり遊びに取り入れるなど、様々な体験を積み重ねながら好奇心や探求心を育んでいる	・気候や天気のいい日には八幡神社や八幡山散策に出かけ四季折々の自然に触れることができた。階段の昇降や自然物拾い、広場での色々な体験を楽しんだり、拾ってきた落ち葉や木の実などの自然物をままごとや製作に取り入れたりして遊ぶ姿が見られた ・外部講師の方やボランティアの協力のもと、紙すき、たい肥づくり、囲碁教室、海の生き物教室、シャボン玉教室、ネイチャーゲームなど様々な体験をすることができ子ども達の興味・関心が広がった	A	A	・八幡山での散策を楽しんでいてすばらしい	・引き続き、八幡山の四季折々の自然を活かした探索活動を行っていく ・自然物や廃材などの教材が使いやすい環境作りを検討し、子どもが物を大切に扱い自ら片づけやすい環境にしていく
8 家庭との連携・協力	(1)家庭教育への支援機能の充実	お便りや連絡帳、クラスボードなどで、子ども達の姿や園の取り組みなどを保護者にわかりやすくタイムリーに伝えるよう努めている	・お便りや連絡帳をコドモンで配信するようになり、初めは戸惑うことも多かったが少しずつ職員、保護者共に慣れてきた。デイリーボードでの配信を開始したことで子どもたちの日々の活動がタイムリーに伝えられるようになった	A	A	・年長児は小学校と交流が行わているが、乳児だとわかりにくい。タイムリーに配信されているので、親子の会話が弾んでいる	・保護者に子どもの日々の様子をわかりやすくタイムリーに発信していけるようにする
9 近隣の学校との連携	(1)近隣の園との連携の推進	公開保育や公開授業に参加したり、散歩や行事見学を通して近隣の小学校や連携園との交流を大切にしている	・保育者が他園の公開保育に参加したり、小学校の公開授業や言葉の教室の様子を参観するなど、学ぶ機会をもつことができた。また、自園の公開保育に他園の保育者が参加することで交流を図り情報交換を行うことができた ・年長児が森下小の一年生や小黒こども園と交流したり、園庭開放の際に静岡学園保育園との交流を行うことができた	A	A	・高松、森下地区に「ときわだより」を回覧しているので、八幡こども園がある八幡2丁目の町内会に回覧を回すことで園のことを知ってもらうこともできるのでは	・小学校や近隣園との交流ができたので、引き続き交流ができるように小学校と連携を図り計画していく ・他園の公開保育の参観や小学校の授業を参観し、子どもの育ちや学びを共有していく
１０ 地域との連携	(1)信頼される園づくりの推進	地域の方への子育て支援や地域の方との交流の機会を大切にし、地域に根ざした園づくりに努めている	・近隣の女子高生が来園したり、いきいき教室で地域のお年寄りとの交流を持つなど地域の方々との交流を図った ・園庭開放やおしゃべりサロンの開催の際に地域の方と乳児との交流を図ったり、見学者に丁寧に対応することでこども園の雰囲気を知ってもらうことができた。今後も地域の方と園児との交流を大切にしながら地域密着の園づくりに努めていきたい	A	B	・森下公園でおしゃべり会や防災訓練が行われている。できることで八幡こども園をアピールしていく方法もある	・子どもの散歩や職員が地域の自治会やお年寄りとの交流に出かけることで地域の方とのつながりを作っていく ・おしゃべりサロンで園児が日頃の取り組みを紹介する機会を作り交流する場を作っていく